

# 木原幹雄

Mikio KIHARA

(株)キユー急便契約ライダー、キユー急便ライダーズギルド代表、ヒューマンネットワークワニリアクトリー



## すべては必然

「いま、思えば一度スキーをやめて良かった」。木原は心の底からそう思う。「マイナスからプラスへとすべてが変化していく数年間は、本当にいい経験だった」。すべては必然。求め、苦しみ、乗り越えたものだけが手にする真実。

時見宗和…文  
text by Muneakazu Tokimi

矢田部 裕…写真  
photograph by Hiroshi YATABE



つねに装着しているイヤホンをとおして無線連絡が入ると、木原幹雄はすみやかにモーターバイクを安全な場所に止め、携帯電話を取りだしてメールをチェックする。

無線の発信元は東京、世田谷区にある(株)キユー急便本社ビルの二階、通称「配車室」。配車室のコンピュータは一五〇台のモーターバイクの居場所をGPSによって把握しており、そのなかから依頼内容にもっとも適した一台を選び出す仕組みになっている。

配車室から木原に送られてくるメールにはURLが書かれており、ログインすると、画面に荷受け場所、送り先、距離、運賃といった依頼の内容が現われる。内容を確認し、荷受け開始。ボタンをクリックすれば、新しい仕事の



始まりだ。

目的地が決まった瞬間、木原の頭のなかでささやかなレースが始まる。たとえば五通りのルートが浮かんだとき、木原が乗ったバイクとイメージのなかの四台のバイクがいつせいにスタートを切り、それぞれのルートを走り始めるのだ。木原の頭は配車室のコンピュータのように五台のバイクをとらえ、データを刻々と更新していく。

「関東甲信越地方はナビゲーションなしでどこにでも行ける」が、木原が運転するバイクが先頭でゴールするとは限らない。交通状況などによって、イメージのなかのバイクが先着することもある。いずれにしても結果はそれまでの経験に上積みされ、次のレースへの参考データとなる。同じ状況は二度とないから、あきることはない。仕事だけが無味乾燥ではない。遊びではないけれど、どうしたって「いつも楽しい」。

木原がバイクの免許を取ったのは一六歳のときだった。「集団で動くのは苦手だった」こともあって、バイクに没頭した。朝、早起きして箱根を走り、それから登校することもあった。いつまでもバイクに乗り続けたいと思ったが、当時、職業ライダーはレーサーしかなかったので、あきらめるよりほかになかった。

バイク便のライダーという職業にめぐり会ったのは一九九九年五月。それ以後、今日まで、バイクに向かい合う

ときの気持ちは、いつも高校のときのように新鮮だ。情性でハンドルをにぎることはないし、動きのひとつひとつに「めちゃくちゃ、こたわる」。それにしてもスキーとライディングは似ている。走り始めるといつもそう思う。すべての場面で最高にしたいと思いつつ走り、いつも最高にはならない。そんなところもスキーとライディングは似ている。走り終えるといつもそう思う。

### 九年間、突っ走り 燃え尽きた

一九六六年(昭和四一年)一月、木原は東京に生まれた。

「雪が軽くてふわふわで雪だるまが作れなかった」。東京大学工学部の教授だった父親に連れられて初めてスキー場に行ったのは三歳のときで、場所は新潟県の燕温泉。宿泊先は日本の基礎スキー界の礎を築いた藤巻文司が経営する旅館、花文だった。





木原の足取りが大きく揺れ動いたのは高校に入ってからだった。内面と現実のギャップを見過ごすことができずにテストを白紙で提出。停学による出席日数の不足で留年。夫人と出会ったのは二度目の一年生のときだった。

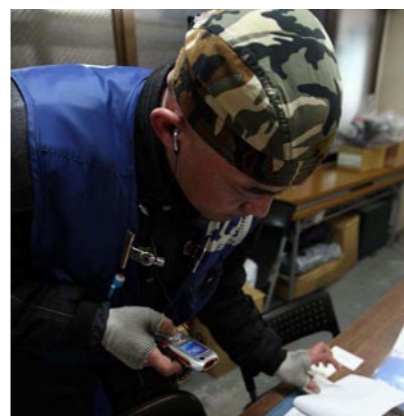
校に入学してからだった。年末年始と春休みを利用して藤巻文司の元に通ったが、みんながステップインのバインディングを使っている時代に自分の道具はお下がりのカンダハ。なんとなくおもしろくなくて、スノーモービルの運転に熱中。お客さんを迎えるに花文から赤倉にすつ飛ばし、たびたびベストラップを更新したが、ゴールで待っているのは、いつも京王観光の事務員の小言だった。「お前、飛ばしすぎだ」。



高校を卒業後、いわゆるフリーターを二年間、それから大学を卒業するまでの四年間、燕温泉でのアルバイトは約一〇年間続き、もともとも長いときは一二月から翌年の五月までこもりつきりになった。

一九歳のときだった。周囲の人たちと連れだって赤倉に滑りに行った木原は、その帰り道、地元の人々やベテランスキーヤーが使うコースをたどったところ、春先の雪がカリカリに固まった四〇度を越える急斜面に遭遇。「足がすくんでまったく動けなくなっ

た」。スキーがうまくなりたい。心の底からそう思った木原は、「それを取ればなんでもできると思っていた」パッパッパッ一級を取得。だが翌日、急斜面で小まわりをしてみたら「ぜんぜん気持ちが悪くなかった」。



大学卒業後、(財)東京YMCAに就職。決め手は会社案内のパンフレットのスキーキャンプだった。一九九〇年代の就職戦線は買い手市場。すんなりと入社を決めた木原は「いろいろとやらなければならぬ仕事はあったけれど、スキーを前面に押し出して突っ走った」。ボランティアリーダーの養成、学生リーダーやスタッフのトレーニング。さらに休日もトレーニングに

注ぎ込み、滑走日数は年間七〇日に達する。最終コーナーのところに××社の看板があるところでゲートをくぐってください。ゲートで支払いをしている車がある場合、その車の横を通ると、機械が誤作動を起こしてゲートが開かなくなります。このタイプのゲートに共通する注意点で、クレームの原因になるのでくれぐれも気をつけてください」

電話の向こうで、木原の端正的確な指示を受け取っているのは、研修中の新人だ。「この仕事が本当に向いているかどうか、本人が見極められるところまでは付き添うことが責任。現在、キユウ急便ライダーズギルド」というライダー組合の代表を務めている木原にとって、新人の面接や研修は重要な役割になっている。

バイク便のライダーたちは、基本的にバイク便会社の社員ではない。会社と請負契約を結ぶ個人事業主だ。各個人事業主が(株)キユウ急便に対して、営業時間や料金などを記載した営業案内を提出。これに基づいて請負契約を締結。毎月、請求書を会社に出して、工賃を受け取る仕組みになっている。

木原が「目的を同



じとする職人による相互補助組合」としてのギルドを(株)キユウ急便に提案したのは昨年の四月のことだった。めざしたのは会社と戦うための組織作りではなく、会社とともに良い環境を実現するための結束だった。(株)キユウ急便は木原の提案を了承し、キユウ急便ライダーズギルドが正式に発足。当面の目標を人材の確保と定着率のアップに絞った木原の頭には浮かんだのが、スキーヤーへの積極的な呼びかけだった。

スキーシーズンが終わって、前の職場に行くと『もう仕事はないよ』と言われるなど、オフシーズンとオンシーズンの仕事の切りかえで悩んでいるス

キーヤーは多いはず。だけど(株)キユウ急便なら、決められたことをきちんとやれば、一二月に『来年の四月に戻ってきます』という営業案内を、胸を張って出すことができる。

「若い頃の自分」をモデルにしたプレ

を履かずにいた木原に、夫人がそう声をかけたのは四年前のことだった。燕温泉に行き、花文に上がると、そこにはなつかしい光景が広がっていた。以前と同じままのペロアの柔らかなクッションの椅子に座り、ビールを

と、翌シーズン、冬の大半を休業。雪深い燕温泉に駆けつけて無給で雪かきを手伝った。

「時間を作って来ますので、ぜひ勉強させてください」

神田ブーツ研究の阿部丈夫にそう頼

部の少しぶつきらぼうな口調を聞きながら木原はしみじみと思った。

「戻ってくるのができたんだな」

どこから『戻ってくるのができた』と？

「スキーをやめたのは自分の意志ではありませんでした。精神的、肉体的、経済的にどうしても続けられなかった。いやでも現実を受け入れなければならぬという、人間としてもっともつらい状況からよく戻ってこられたと。でも、振り返ればマイナスからプラスになっていく何年間かは、本当にいい経験でした。一度スキーをやめて良かったと思いますが、この先、同じことがあったらもう取り返しがつかない。だからやりたいことをやるだけやりたいと思っています」

今後は神田ブーツ研究へと仕事をシフトしていくのですか？

「いえ、ふたたび技術選に出られるようになったのは、キユウ急便が自信をつけさせてくれたからです。だから、やめるということは考えられません」

後続の人たちの参考のために今シーズンの滑走日数を。

「技術選予選まで約二〇日間、これからシーズンが終わるまで二〇日間というところですよ」

個人事業主としてはそれが限度ですか？ そう聞くと、木原は笑いながら答えた。「それを越えようと、いろいろなものが壊れていきそうで」。



Cutting Edge

ゼンテーションは成功した。

## 旅館の椅子に味わった 生まれて初めての感覚

「たまには燕温泉に行ってみたら」

(財)東京YMCAをやめたあと、正指導員の研修会以外、まったくスキー

一口飲んだとき、木原はそれまでに一度も味わったことのない感覚に襲われた。「こういう時間が必要なのだというところが、身体中に入り込んできた」。

当時、燕温泉はスキー場閉鎖に揺れていた。木原は「自分の根っこになっている場所」に対して何かがしたい

んだのは、ライダーズギルドを提案した直後のことだった。阿部とは二三歳のときからの付き合いで、その職人的な腕のたしかさも後継者がいないことも知っていた。そして何より「その人柄にのめりこんでいた」。

「メモはちゃんととっておけよ。阿